

「日中植林・植樹国際連帯事業」壹基金防災減災訪日代表団

参加者の感想（抜粋）

○スケジュールがびっしりと組まれていた。交流のスタイルも多様で、内容も幅広く、交流団のメンバーと訪問先の皆さんの中で幅広い形の交流ができた。スタッフは真面目で、時間に正確で、責任感がある。

○日本政府、NPO 団体、企業などの各部門が、防災減災の教育において完全に同じ理念と目的を持って取り組むことで、学校教育に始まり、民間 NPO 団体である防災教育チャレンジプランや民間の取り組みに至るまで、みな統一された考えのもと、それぞれの分野で共通の目標に向かって、力を合わせて努力をしていた。防災福祉コミュニティにしても、防災教育チャレンジプランにしても、「知、技、心」の全てを兼ね備えた人を育てようとしているところがとても印象的だった。この貫徹した趣旨と目標、性質の異なる多くの部門が分業・協力している姿は、中国にとっても参考になると思う。

日本人の命を尊重する気持ち、人を尊重する気持ち、災害による被害を忘れないために努力する姿に驚かされた。私たちも学ぶべきだ。これらの事柄に関する日本の教科書の内容は、すべてで「知、技、心」の3つにまつわることが言及されていた。知識と技能を身につけるのは決して難しくないが、健全な人格を育むことや、他者への共感力やボランティア精神にあふれた国民を育てることは、非常に難しい。人材育成における日本の教育のこのような目的は、中国が最も学べきところだ。私たちの教育は、どんな国民を育てようとしているのだろうか？自立した人格と細やかで豊かな感情、そしてボランティア精神を持つ人は、将来、どんな大きな災害に遭遇しても、自分だけでなく、他者をも救うことができる。

日本人は素養が高く、礼儀正しく、責任感が強い。どんな仕事であっても、どんなポジションの人でも、全力で業務に打ち込む。そんな勤勉さと責任感は、中国人も学ぶべき点だ。私たちは時々、自分はまだまあまあ良くやっているし、責任感もあると思うことがある。でも、日本人にははるかに及ばない。日本人は我々に、まるで教科書のお手本のように、仕事熱心で責任感が強いというのは、どういうことかを教えてくれる。

○日本側の手配がとても行き届いており、優れたスケジュール管理に感心すると同時に、参考にしたいとも思った。専門的なテーマ（例えば減災防災など）を切り口に問題にフォーカスしていく方法は、小さなテーマから物事の全体を知ることができて、とてもためになったと思う。

○植樹活動においても、環境や防災分野の視察においても、日本人の自然に対する向き合い方を見ることができた。それはつまり自然を「尊重する」ということ。ここで言う尊重とは、つまり、日本人が畏敬の念を持って自然と向き合い、調和の取れた関係を築こうと最大限の努力をしているということであり、それは日本人の命と幸福を大切にする気持ちから生まれているものだ。日本人は災害の記憶を忘れず、後の人々に災害被害の残酷さを伝えている。そしてその思いが、後に続くすべての復興作業の動機となっている。帰国したら、人の感情や、人を尊重する気持ちをもっと大切にして、災害やその他の課題に取り組んでいきたい。人が互いに尊重し合い、理解し合う心を喚起することこそが、本当の意味での「人間本位」の取り組みだと思う。

このほか、日本の社会全体が、「人間本位の意識」のもとで動く究極のプロフェッショナル集団

のようにも思えた。たともものすごく細かな作業でも、全力でやり遂げる。どの段階においてもプロの技で力を尽くして取り組むことで、はじめて全体としての成功を得ることができる。

中国に帰ったら、日本で感じたプロフェッショナルな精神をまわりの人に伝えたい。まずは自分から、専門分野の技術を磨き、サービス精神と、細やか、かつ真面目な態度で自分の仕事を全うしたい。主催団体に心から感謝いたします。

○良かったところ：スケジュール、宿泊、学習・視察がとても良く手配されており、スタッフの仕事が細やかだった。特に環境や防災分野の視察内容が充実しており、学びの面で思いがけない収穫があった。

○今回の訪問では、有明の丘基幹的広域防災拠点の視察、神戸の人と防災未来センターの視察、日本および兵庫県の減災教育についてのレクチャー、植樹活動などに参加したことが、非常に印象深く心に残っている。

まず、日本側スタッフの仕事がものすごく丁寧だ。日程表にはスケジュールが細かく書き込まれ、宿泊するホテルのフロアマップから、宿泊者の情報がすべて事前に書き込まれた部屋の振り分け表までが事前に準備されていた。

次に、日本人の時間管理は非常に厳しい。時間を守り、約束を守る精神は称賛に値すると思う。

3つ目に、防災について学習する中で、この分野における日本の先進性と、世界をリードしていく日本の理念を感じ取ることができた。また、NPO 団体間の良好なコミュニケーションが、防災教育を広く人々の日常生活にまで浸透させる役割を果たしていることがわかった。

今回の研修には、私自身の仕事に影響を及ぼしたり、或いは後押しをしてくれる内容や、仕事をしていく中で参考にできる学びが非常にたくさんあった。主に地域コミュニティの減災活動を進めていく中で、どのようにしてコミュニティと学校を結びつけるのか。現在の中国の社会組織は国民を対象とした減災活動の初期段階にあり、考え方、方法、形式の上で、まだまだ改善の余地は大きい。また、コミュニティへの参加や人の動員に関しても、防災福祉コミュニティについての理念や仕事の進め方について、日本の方法から学ぶところがあった。災害後のコミュニティの再建については、台湾のコミュニティ建設と共通の点があると思った。コミュニティ再建のカギは、寄り添うということにある。寄り添っていく中で力を合わせる。どのようにして本当の意味で寄り添っていくのか。これは、コミュニティが再建作業を行う上でよく考えるべき課題である。私たちの再建作業はコミュニティに寄り添っていけるだろうか。異なる性質のグループが防災減災の教育活動に参加することを推し進めるために、日本のやり方からもう一つ参考にできるのは、コミュニティや学校、異なる性質のグループが参加できる活動やゲームをどのように開発していくかということだ。これは私たちが今取り組んでいる地域コミュニティと学校内の減災活動を進める上でも、大きな挑戦である。今回の研修で得られた気づきと、既に成熟した日本のプログラムは中国でも応用できる。阪神淡路大震災から 22 年、日本は減災の分野で世界の最先端にいる。中国も四川大地震から 9 年が過ぎた。減災教育や国民の防災意識について、世界各地の経験に基づく、より進んだ広め方を学ぶ必要がある。

○環境災害に対する日本人のねばり強さ、事実に基づき試行錯誤を繰り返す着実な仕事ぶりが深く印象に残っている。私たちが日本から学ぶべきなのは、「技」だけではなく、その「道」の精神である。また、植樹で訪れた楽農生活センターの農業と自然を敬う姿勢に驚いた。無臭化された化学

肥料に、清潔な農業施設。その自然との調和の在り方に驚かされた。

○NGO と NPO：日本の多くの公益組織は日本政府から財政的支援を受けている。しかし、そんな状況においても、民間組織としての積極性は失っていない。政府はその活動を取りまとめながらも権力は行使せず、組織は自由に成長できるという良好な形が出来ている。そこが中国とは大きく異なる点だ。中国の組織の多くは民間からの資金に支えられているため、「いかにして個人の寄贈者に活動について理解してもらうか」という問題が存在する。政府による支援と異なるのは、個人がフィードバックとして求めるのは、その事業の影響力や規模の拡大ではなく、何を感じ取れるかということなのである。日本の NPO にはその必要性がないとはいえ、いかに参加者に何かを感じ取ってもらうかという工夫が徹底してなされている。それだけに留まらず、公益事業に「不完全さ」と「現地の民間組織が参加できる空間」を残すという理想の形をうまく実行に移している。中国の NGO も参考にできると思う。臺基金の理念である「公共の利益から」という視点は、図らずも日本のやり方と一致している。私たちが実践を積んでいく上で、日本の存在は私たちの良き先駆者となってくれる。

着実に研鑽を積む姿勢：中国でも事業の「モデル」や「理論」といった大きな視点から防災を学ぶ講座はよく開かれている。そこでシェアされる知識は、公益事業業界の外の人から学ぶ内容であったり、研究者が構想を練ったシステムであったりするが、いざ実践に移すとなると、初心を見失ってしまうということがよく起こる。被災者に必要なものは何かを考えることが問題の本質であり、そうした細やかな取り組みが、日本の防災研究では地に足のついた形で行われている。それだけでなく、誤りがあればちゃんと向き合い、試行錯誤を重ね、災害の分野から一步一步、問題が浮上すれば着実に解決していく。そして、自国の研究の結果と謙虚に学ぶ姿勢によって、日本は災害分野のエキスパートになった。中国の災害と防災に関する問題も、日本と同様に複雑だ。中国は日本から「技」を学び、さらにこのような「道」も学ぶ必要があると思う。

○どの訪問先もできるかぎり中国語資料を用意してくれ、心をこめて講演の内容を考え、パワーポイント資料を準備してくれていた。とても感動した。

スケジュールはオンタイムで進み、アクティブなプログラムと座学がうまく組み合わせられ、難度も適切だった。とても良かったと思う。

例えば防災福祉コミュニティの資料など、優れた経験や技術に関する中国語資料をいただけたらもっとよかったと思う。

○防災福祉コミュニティの経験は、直接中国でも参考にできそうなものが多かった。この点が今回の最大の収穫だと思う。中日両国とも、一部の、或いは大多数の人が防災に関心を示さないという問題を抱えている。また、どちらにも、都市化が進んだ後のコミュニティの衰退という問題がある。大都市では、コミュニティの人と人の関係が疎遠になっている。似たような社会的背景のある両国の間には、防災活動の技術や経験に相通ずるものがある。この分野のより多くの資料を中国語に翻訳してくれることを希望する。互いに交流と学習を深めていこう。

コミュニティの緊急避難場所として、ハード面だけでなく、学校が持つソフトな面の力も大切だ。学校がコミュニティに対して行う防災訓練や防災教育、避難場所としての役割などが、現在の中国に欠けている部分であり、急ぎ対策が必要である。避難場所の運営に関するもっと多くの資料を提供いただき、学習し、交流できることを望んでいる。

NPO 法人プラス・アーツが提唱する、防災教育を楽しく、面白く、現地の状況に則した形で行うという方法は、防災知識を規格化し、システム化したあとに、それをより広く普及させるための教育の問題に直面する。中国は、この面で日本の経験から学んでいく必要がある。

中国が日本に及ばないところ：①建築の安全に対する法制度による保障と実施。②減災に関する知識の経験に基づく総括と、現地の実態に則した応用。減災知識の真偽の識別は中国ではいまだ課題であり、日本の状況に及ばない。③知的財産権に対する意識と法制度による保障の未熟さ、公益事业業界のマナーの乱れ（若年化）、悪質な資金調達の入札など、中国に残るこれらの問題が業界の発展を妨げている。④防災教育に対する日本政府の力の入れようは中国と比べものにならない。それは資金をいくら投じたかではなく、研究開発の精密化に対する力の入れ方という意味である。⑤中国には日本とは比べものにならないほど、まだまだ広範囲に農村が存在しており、都市化のレベルや問題の特徴も両国間では異なる。